

二〇一九年六月二八日

玄関の白壁夜ごと家守来る

ぽんこ

梅雨の鬱一掃せむと美容院

明日香

散らばれる山羊の白さよ大夏野

素 秀

滴りや洞窟に在す不動尊

やよい

川風の通ひ来る宿夕河鹿

愛 正

母里へどの道とるも青田風

菜 々

二〇一九年六月二七日

梅雨工房絵筆明るき色選ぶ

満 天

煙吐くごと山腹の梅雨の雲

明日香

纏れては闇に寄り添ふ恋螢

智恵子

二〇一九年六月二六日

白鷺の見え隠れせる苗の丈

たか子

奥の院抜けてこれより登山道

せいじ

二〇一九年六月二五日

宿下駄の弛き鼻緒や蛍狩

宏 虎

亡き夫の古びし黴の革靴

はく子

点と線闇に纏れる蛍かな

たか子

二〇一九年六月二四日

霊峰の水を湛へし代田かな

さつき

篝火に浮かぶ夜涼の能舞台

やよい

二〇一九年六月二三日

虚子句碑の文字をなぞりて蜥蜴這ふ

宏 虎

峡の田の頭上過ぎりて時鳥

三 刀

片陰に終はるともなき立ち話

満 天

丘一つ覆ひて風のラベンダー

たか子

二〇一九年六月二二日

桔梗のボンと開きて星となる

はく子

間遠なるバスのひびきは暮

せいじ

毎日句会みのる選・二〇一九年六月三〇日